
アルフィミィ = ゼーケブレヒトの冒険

メア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルフィミィニゼーケブレヒトの冒険

【Nコード】

N9820V

【作者名】

メア

【あらすじ】

始めまして、私はアルフィミィニゼーケブレヒトです。転生した美少女です。生贄にされて鬼に犯されそうになるなどの不幸にもめげずに頑張るのです。

そして、触手って以外と美味しいと思っている私です。

そして、前にやってたVRMMOに似ていますの。

触手の吸収能力引っ提げてがんばりますの！！

これは性転換とレズ（入るかも）があります。嫌な人は戻ってね。

1話 アルフィミィになりました

皆様おはようございますですの。私、アルフィミィ＝ゼーケブ
レヒトと申しますの。

はい、この喋り方とアルフィミィの名前で分かりますわね？言っ
てしまえば転生ですの。それも、34歳男からですの。

そして、現在大ピンチですの。

私は神社のような所で、赤い肌に角が生えた大男に押し倒され、
犯されそうですの。まったく、こんな趣味は無いですの。まあ、言
ってしまえば生贄ですの。

なんで、こんな事になったかというところ……朝気が付いたら身体が動かなくて、見たことあるような無いような人が覗いてました。はい、ご両親ばい方でした。しかも、外見だけは例の二人です。

四、五年が立って、動ける様になったので、今まで逃げていた容姿を確認してみたら、長い青い髪に紅い瞳……丸つきりアルフイミイでした。ついでに言うと、拾われたようですよ。そして、名前を聞かれたのでアルフイミイと名乗ってしまいました。だって、この格好ですよ？仕方ないですわよね？そして、口調などは女性フォルモンのせいか、変な感じになってきたので女言葉にしました。うん、どちらも仕方ないからですよ。自己弁護完了ですよ。

さて、この世界デザインアはやっぱり弱肉強食でモンスターが跳梁跋扈しているファンタジー世界ですよ。モンスターに対抗する為に作り出された術技もあります。といっても、紋章を持ってないと意味はぜんぜんございません。紋章を身体に刻む事で世界に干渉し、事象を書き換えることが出来る見たいですよ。あと、この世界にもやっぱりLvはございますのよ？ちなみに、私は0ですよ。では、世界説明はこのぐらいにしますの。

8歳の時、森で遊んでいたら人攫いに会って捕まりました。それから、奴隷商人に売られてたらだと4年過ごしたら生贄として買われてしまいました。そして、捧げられたと言う訳ですよ。

はい、回想終わりですよ！という訳で、冒頭に戻るですよ。ちなみに、抵抗は皆様のためにしませんの。

「ぐへへ、なんだ抵抗しないのか？」

「抵抗してよろしいんですの？」

「そつちの方が楽しいからな！」

「では、抵抗させていただきますの〜」

手を男……鬼の顔に這わせる。

「なんだ？愛撫か？」

「そつかも知れませんの」

「ぐへへ」

油断したところに鬼の両目に指を入れて眼球を握ってやるですの。

「ぎゃあああああああ！？眼が、眼があああああああ！？」

暴れる男は私の手を振り払おうとすると、その力によってブチブチと眼球が取れてしまいましたの。

「あらあら、大変ですの〜」

鬼の下から抜け出して辺りを見渡すと、飾られた禍々しい紅い刀身の日本刀が飾られていましたの。これを使いましょう。

「んしょ」

刀に触れると刀から触手が出てきて、手に絡みつき中に進入して来たですの。

「これは危ないですよ」

触手を空いてる手で掴み、徐に食べてみるですよ。

「以外に美味しいですよ………（はむはむ）」

「妖刀は恐怖で震えだした」

そして、しばらく食べていると刀から大きな一つの目玉が出来た。

「目玉焼きですよ」

「妖刀は完全にアルフィミイに食べられた」

「ご馳走様ですよ」

「アルフィミイは妖刀紅桜を手に入れた」

握ってる刀を構えて苦しんでいる鬼の背後に回る。

「ぞくぞくですよ」

鬼のお尻に何度もなんども突き刺していくですよ。さらに、刀じゃなく身体から触手が伸びて鬼を食べ出したですよ。

「あふう、痛てえ！何も見えないし、一体何がどうなってやがる！」

ここは例の呪文ですよ。

「眼が、眼が~~~~~!?!?」

「バルス」

触手が答えてくれたのか、身体中から一杯の触手が出て鬼を食べていくのです。

「新発見ですの。バルスは貪り喰らう呪文だったですの〜」

違います。

しばらくすると触手は鬼の一部を除いて完食したですの。

「アルフィミイは生贄レベルが0 15に上がった。」

ちよっ、色々待つですの!!生贄のレベルが上がるってことは供物として力が增えるってことですよ!!!そんなのゴメンですよ!!やり直しを要求するですよ!

システムに突っ込まないでください。

「くっ、仕方ないですの………何か着る物を探すですの〜」

破かれてボロボロの服をどうにかする為に、タンスを開けて物色する。

「アルフィミイはドラ エ勇者(盗賊)になった」

「ちよっと待つですの~~~~~」

「システムは無視した」

「く、背に腹は変えられないですよ」

タンスや箱、壺の中を漁ると青い着物を見つけたですよ。さっそく着てみるといい感じだ。

「アルフィニイは鬼の着物を盗み装備した」

もう突っ込まないですよ。にしても、青い髪に青い着物。以外に似合うですよ。

紅桜を鞘に戻してから、慰謝料として見付けた30000Gを頂いていくですよ。ガルド

「やっぱりドラ エ勇者（盗賊）だ」

1話 アルフィミィになりました(後書き)

アルフィミィ=ゼーケブレヒト

LV15

種族：人間

職業：生贄

武器：紅桜

防具：鬼の着物

特殊能力：触手

2話 紅桜

触手つてもにゅもにゅしてて以外と美味しいと思ったアルフィミイですの。

そして、左胸辺りにさとりんのように目玉のようなのが取り付いてしまいましたの。これは、妖刀紅桜の奴ですわね。では、ペルゼインとでも名付けましょう。

さて、頂く物は頂いたので外に出てみたのですが、皆様アルフィミイは知らない間に鬼ヶ島に来ていたようですの。

見渡す限り森と地平線しか見えませんの………私が出て来た山の山頂にある洞窟以外の人口物は船着き場だけですの。洞窟の反対側に有るかも知れませんが。

「さて、どうしましょう?と言っても行くしかないですの」

山を下って森に向かいましたの。

森に入ると、沢山の魔物の唸り声が聴こえて来ましたの。

「そして、一歩目でエンカウントとかおかしいのです!？」

私の目の前には木の上から降ってきたお猿さんモドキ。身長が目測二メートルで、爪が鉤爪の様に長く鋭利に伸びて、人目に殺傷能力の高さが解るのです。

「うきいー!」

もちろん、私はお猿さんモドキにとって餌ですの。もちろん、大人しく食べられる気はありませんの。

「お猿さんモドキがアルフィミイの眼に捕らえられない速度で接近し、爪を振り下ろした。しかし、自動で反応したペルゼインがアルフィミイの身体を操り、紅桜を抜刀し切り上げて爪を弾いた」

「身体が勝手に動くのです!？」

まるで身体が別人のように動きますの。やっぱり紅桜って、銀に出て来たあれですか？

「ウキいっ!」

「お猿さんモドキの爪を飛び上がり、前回りの要領で回転しながら背中を斬りつけて着地。着地と同時に振り向き様に一閃し一刀両断した」

「………白夜叉?」

あの人の動きにそっくりですの。しかし、本当に人間ですか?身体

能力とかおかしすぎですの。だいたい木刀で刃物と拮抗するとかありえませんが。面白いですが。

ガサッ。

「・・・・・・・・・・ちょっと待つですの」

奥から先程のお猿さんモドキが二体現れたのですが、即座に駆け寄り二体を一刀で斬り伏せたですの。

ガサ、ガサッ。

なんで動いてないのにエンカウントするんですの！？しかも、続々と来てますの！？

「32時間後」

皆様、アルフィミイは人間辞めたようです。というのも、私から生えた数十本の触手達がうのようによって、モンスターを全自動で喰らってしまいましたの。

白夜叉さんの事、何も言えませんの。ごめんなさい。

さて、今なお動いてないのにエンカウントが続いているお陰でレベルが着々と上がっていますの。ステータスを見てみるこんな感じですよ。

アルフィミィーゼーケブレヒト

Lv15 27

種族：人間

職業：生贄

武器：紅桜

防具：鬼の着物

特殊能力：触手

で、なんでエンカウントするかといいますと、職業：生贄のせいみたいです。

「生贄の儀式の結果、モンスターが好むフェロモンを出すようになったため、アルフィミィはモンスターにとって極上の味わいだけでなく、力まで得られる特別な存在になった。しかも、触手がモンスターを喰らって強化するからアルフィミィの価値はうなぎ登り。もててだやったね」

「どこも良くありませんのっ！？むしろ、ダメな事だらけですの！？」

しかも、四六時中モンスターが襲って来るから寝れませんの。まあ、触手から供給される力と栄養のお陰でお腹がすくとはありませんが………眠いですの。けど、寝たら食べられてゲームオーバーですの寝れませんの。

と、言うわけで誰か助けてくれませんか？

「禁則事項です」

殺したいですの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
無理ですね。

「船着き場には人が居ませんし・・・・・・・・どうしろと？」

「貴女が殺しました」

仕方ありませんの。鬼に襲われたので、反射的に殺しただけですの。
だから、私は悪くありませんの！

「こほん、やっちゃったことは仕方ありませんの。だから、こころ
で生きて行くですの！」

とりあえず、力の使い方を学びますの。

3話 脱出鬼ヶ島ですの！

皆様、おはようございますの。人恋しい触手魔装少女アルフィミ
イニゼーケブレヒトですの。

寂しさの余り、魔物さんを刺殺しまくってしまいましたの。お陰で
白夜叉さんの動きを物にできてしまいましたの。

そして、いい加減鬼ヶ島から出すですの！

さて、報告は終わりましたのでご報告致しますの。皆様、この身
体はどうやら敏感過ぎるようですの。全身性感体のような感じで・
・・・というのも、私達日本人はほぼ毎日身体を洗いますよね？
私は女の子になったので毎日洗わないと気持ち悪くて叶いませんの。
しかし、ここに風呂は有りませんし、水浴びでは味気ないので、私
の特殊能力触手ちゃんを使いますの！やり方は簡単で触手にお口を
作って、身体にもにゅもにゅさせるですの。触手のお口が身体中の
垢や汚れなどを綺麗にしてくれてとても便利ですよ？難点はぬる
ぬるになって、触手に犯されてる感じになることくらいですの。で
も、気持ちいいし、ぬるぬるは水浴びで終わりだから問題は有りま
せん。

「しかし、身体能力も馬鹿みたいに上がりましたの」

流石、紅桜ですの。学習機能だけでなく、自己進化の吸収機能も優秀でガルーダから鷹の眼（見かけは変わらない）を頂いたお陰で視力・動態視力・夜目もバッチリ高くなつたですの。他には鮫など魚類（？）を食べて水中で呼吸出来たり、サーベルタイガーを食べて筋力と敏捷が上がったり・・・我ながら人間辞めてますの。あつ、一応戦士などの職業になると、神の力か何かで魂を自身の強化に充てられるらしいですの。どこのFateの魂改変！みたいですよ？ちなみに、転職もできますし、何かの隠し条件によって隠し職業が出るので色々あるらしいですの。本当になんてゲーム？と思いますの。ただ、エネミースキルなんて普通は手に入りませんし、魂の強化だって神殿か冒険者ギルドなどのギルドじゃないと出来ませんですの。ただ、神殿から提供されてるだけあつて神殿の権力は高すぎで、困り者らしいですの。まあ、私はそんなの無くても吸収と自己進化で要りませんの！！

ちなみに、職業の生贄に関するデータは以下の通りですの！復習もかねて見てみるですの！

《職業：^{クラス}生贄

特殊能力：貴女の血は極上の味！飲んだだけでステータスアップ間違いないし！か も！！Lvが高いとランクやLvも上がるはぐれメタルのようなレアモノだ！やったね！！

「本人に取って何処も良く有りませんの！？」

特殊能力2：魔物さんのに大人気のフェロモンを放出されて、魔物さん達にモテモテです！いい意味で！

「当然、Lvによって範囲も広くなり、効力も強くなる。ただし、Lv差が開くと下位の魔物達は恐れ多いのか、近付かなくなる。自ら近づく場合はこの限りでないが」

「それって魔物にとってで、私にとってバットテイストですよ!？」

特殊能力3：転職、除去が出来ませんので悪しからず!こんないい能力、一生手放さないよね!」

「それは手放さないんじゃないかと、直ぐに美味しく頂かれてるだけですよ!？」

以上、生贄の説明でした。また、会いましょう!」

「はあああ、二度と来るなですよ。突っ込み疲れましたの。というか、何故に説明がこんなんですの?無駄に怒らせるだけですのに?」

「注：アルフィミイただけの仕様です。変更はあるかも知れませんが」

「……. まあ、百歩譲っていいですよ。ええ、諦めましたとも、ちくしょうですよ!」
ふう、取り乱してしまい申し訳ありませんの。どうぞ、ご容赦下さると嬉しいですよ。

「今日の晩御飯は、何にしようか考え中です。ど・れ・に・し・よ・う・か・な」 ガルーダ君に決めたいですの!」

「魔物達はガタガタと恐怖に奮え、指名されなかった魔物達は安堵し、指名されたガルダは恐怖の余り、取って来ていた餌を手放し巢へと直帰した」

因みに、ガルダはこの頃のお気に入りです。ガルダの飛行能力は欲しくありませんか？私は欲しいです。中々手に入らなくて困ってしまいます。お陰で、全長6メートルもある赤い大鷲さんが全滅しそうです。早く手に入らないかな？

洞窟のあった山を登った先、頂上付近にガルダ達の巢があるですの。

「岩肌に所々開いた穴にガルダ達の巢はあった。しかし、今は閑散としていて、数百ある空の巢が過去の繁栄と栄光を教えている。そう、これはたった一人の食欲魔人の少女によってこの現状は引き起こされた。一日の食事に10匹から20匹も食べていればこうなるのは当然だ。しかも、これを一ヶ月続けているので300から600匹が食べられている。しかも、既に猿モドキが全滅している」

「ふふ、到着ですの」

「ギョルルウ!？」

「諦めて美味しく頂かれますの!」

「ぎゃう!?!(ふざけるな!?!)」

ガルダが周辺に、1メートルもの炎の玉を三つ作り出して放って来たですの。

「わっ、と、ほっ」

「アルフィミは、崖を蹴って上空に飛び出し、炎の玉を回避。触手を伸ばし壁に取り付け、蜘蛛男の様に触手を使う事により、ガルダの攻撃を避けて行く」

「《ポイズンニードル》ですの」

「っ!?!」

壁にくっついている触手から、レッドビー（赤蜂）から奪つ……
・頂いたエネミースキルで、作り出した強力な毒を持った針を大量に放つですの。そう、触手一面にびっしりとですの

「「ぐぎゃっ!?!」」

「あらら、他にも巻き込んでしまったようです。勿体ないですの」

とりあえず、毒針で落ちて来るガルダ達に触手を放ち、パツクリと頂きました。神喰いやマド力のマミさんみたいにパツクンちよですの。柔らかくて程よく絞まった鶏肉がうまうまですの。

「よっ、卵さん、卵さん、何処ですか? あつたですの」

火を起こして、岩を切断して鉄板がわりに熱してから、一部鶏肉の毛を剥いで、ジユウジユウと焼きますの。良く焼いたら次に卵を割って肉にかけて少し塩をかけて焼いたら完成です。

「頂きますの」

こんな生活が一年ほど続いてますの。

「アルフィミイは飛翔能力を手に入れた」

やっ、やった〜これで出れ……………る？あれ、飛翔？まさか？

《特殊能力：飛翔

羽や翼を動かす事によりホバリングが出来る》

……………意味ないですよ！？私には翼なんて無いですよ！？

どうでしょう？流石に翼はまだ生えてませ……………あ、あれは、お船さんですよ！？」

そ、そういえば、毎年生贄を届けてるんですけど。これはチャンスですよ！？

「ふふふ、これを逃がす訳には生きませんの！」

空に飛び出し、重力に身を任せ落下して行きますの。途中で触手を伸ばして距離と速度を落とす。

「飛翔能力なら！」

両腕をバタバタと翼のように動かすと、飛翔能力が発動し落下速度が下がりましたの。なぜか発動するですよ……………まあ、後は触手のお陰でダメージは無しですよ。

「お兄さん、待つですよ」

「えっ、お…………お前は…………なんで生きているんだ！？」

船着き場には女の子と私を連れてきた男がいたですよ。

「鬼を倒したのに決まっていますの」

「嘘だ！」

男は鬼の住家へと走って行ったですよ。

「ふふふ、チャンスですよ」

「え？」

船着き場から小船のロープを外して、沖に船を押し出すですよ。そして、船に飛び乗って紋章機を起動させ水流を操る事で、船が加速して行くですよ。とても便利な技術で簡単に進めるですよ。

「あ…………あの人…………」

「私を生贖にした奴なんて知らないですよ。貴女はまだ儀式はされてないですよ？」

「はい、まだです」

「なら、お家に送り届けてあげますの」

「あ、ありがとうございます」

儀式が行われていないなら、まだ普通に生きて行けるのです。生贄の職業クラスになると、一定時間一つの所に留まると事は出来ませんの。だって、魔物さんが沢山来てしまいますし、そうなると街などが蹂躪されたりしますから。王都や都なら大丈夫かも知れませんが、そんなのわかりませんの。

「」

そういえば、今なら泳いでも帰れるかも知れませんが。でも、海には海皇類もいますし、食べられて終わりの気がするのです。

それにしても、時速300キロくらい出ているのに、風圧を感じないとは思議ですの。紋章で風の膜を作ってるだけですが、やっぱり紋章は化け物ですの。というか、この世界のシステムは前にやってたオンラインゲームに似てる来がしますの。まあ、この子を送ってから色々検証しつつ、故郷に帰りたいと思いますの。あっ、帰るのはダメでしたの。でも、手紙くらいはいいと思いますの。いいよね？

3話 脱出鬼ヶ島ですの！（後書き）

アルフィミィーゼーケブレヒト

種族：人間

1st クラス職業：生贄

ベースレベル：45

1stジョブレベル：44

装備

武器：紅桜

防具：鬼の着物

EX特殊能力：触手操作、吸収、自己進化

ラグナロクみたいに他の装備部位は後で作るかも知れないです。

4話 魔王にばれたですの

皆様おはようございますの。ようやく鬼ヶ島を脱出できたけど、デンジヤラスな人生超特急に乗っているアルフィミイですの。いや、さすが数千体はどうにもならないですよ？という訳で現在逃走中ですの。

生贄にされかけた少女を無事に故郷の村まで送り届けた所までは順調でしたの。でも、村長さんに村の近くにいる魔物を討伐してくれと頼まれたので、各種情報と路銀の提供で手を打ったのが運の付でした。

一步、そうたったの一步森に踏み込んだだけで、エンカウントしたんですの！そして、敵を屠ったらまた現れて………倍々に増えて行き、あつという間に数千体ぐらい集まっては狩られるだけですの。そして、生贄のクラスのせいで隠密しても意味が無いという悲しさですの………よよよ。

という訳で現在時速60キロくらいで爆走中ですの。

「よっ！ほっ！」

もちろん、逃げているだけでは勝てませんの。そして、私は生き残るために他者の被害を度外視することに決めましたの。みんな自分の命が一番大事ですの！！！！

「ふふふ……行くですの……」

「アルフィミイはジャンプし、背中から触手を地面に突き刺して固定し、速度をそのままに急旋回を行う」

「紅桜……斬艦刀モードですの!!!!!!」

「紅桜にアルフィミイの手から生えだした触手が絡みつき、見る見る巨大な刀身を生成した。その刀身は100メートルもの巨大さだ」

「ギフト」

急旋回した遠心力を利用し、後ろに迫っていた大量の魔物に毒付の斬撃をプレゼントですの！

「ギフト（ドイツ語で毒）を使い、100メートル以内の敵を木々諸共断ち切り……粉砕した。さらに、粉砕された木々は腐りだして行く。それは、魔物も一部の例外を除いて同じ末路をたどった」

「痛いですの……」

刀身が折れて、筋肉の筋が耐え切れずに切れたみたいですよ……人の身で斬艦刀なんてやっぱり無茶ですよ。とりあえず、切れた筋は触手で代用するですよ……にもゆもにゆ。そして、失った細胞を補給するために、殺した魔物を捕食するですよ。もちろん、折れた刀身ですよ。

「吸収が発動。」

ブルーマンティス 64体撃破 斬撃強化64。
青熊 46体撃破 筋力強化23。
黄熊 49体撃破 筋力強化49。
ゴブリン 142体撃破 体力強化7。
ボブ・ゴブリン 56体撃破 体力強化15。
ウルフ 86体撃破 敏捷強化28。
グリーン・ウルフ 17体撃破 敏捷強化34。
エスケープ : ラーニング完了。
集団統率 : ラーニング完了。
豪腕 : ラーニング完了。
経験値 : 37550を入手しました。」

「そしてすぐに、逃走ですの！」

色々、便利なのが入ったようですが………今は脱
兎の如く逃げるのみですの！だって、まだまだいるのは分かりきっ
てますの！！

「っ！邪魔ですの！」

「横から飛び出してきた豹っばい何かの爪を下にもぐり込んで避け、
瞬時に背中から生やした硬くて大きい物でお腹を貫きつつ抜け出し
逃走を再開する」

豪腕はおそらく腕力の増強ですの。集団統率はその通り………
・だから、エスケープを使用して逃走ですの。

「エスケープ 逃げたい弱虫でどうしようも無いチキン野郎にお
勧めです。本当に使用しますか？」

脳内にYesとNoの文字が浮かび上がってきたです。

「Yesですの!」

「ちつ、逃走に関して速度3倍上昇しました」

「舌打ちってひどいのですの!」

あれ?何倍?

「3倍」

今、時速60キロで走ってるんですけど?

「3倍は?」

60×3=180ですから………時速180き………
あぐっ!!

「速すぎですの!」

しかも、逃げるのやめた瞬間に解除ですか………使
づらいですの!

あれは、湖………にやりですの。

「………蛸墨!」

「アルフィミイは大量の触手から蛸墨を出して、魔物の眼をくらま
せた」

さらに、触手を対岸にセット、触手を戻す力を使って一気に渡って……水に手を入れて準備が完了ですの。

「ギフト」

生成するのは強力な麻痺毒ですの。それを手から湖に流し込み続ける……視界が奪われた魔物達は私が発する匂いによって真っ直ぐこっちに向かってくるですの。

「ドボン！次々に魔物達は毒の染み込んだ湖に入っていく、行動不能となっていく。そこに、アルフィミイから作り出された触手達が捕食を開始する」

ふふふ、大量ですの。

「吸収」が発動。

マーメイド32体撃破 水属性耐性上昇。

セイレーン2体撃破 水属性耐性上昇。

オーガ47体撃破 体力強化47。

オーク78体撃破 体力強化47。

ケンタウロス5体撃破 器用上昇10、敏捷上昇10。

レッドキャップ39体撃破 器用強化39。

インプ145体撃破 炎耐性上昇。

潜水 : ラーニング完了。

美声 : ラーニング完了。

呪歌 : ラーニング完了。

呪歌耐性 : ラーニング完了。

精密射撃 : ラーニング完了。

射程延長 : ラーニング完了。

豪腕　：強化完了。

飛翔　：強化完了。

経験値78940を入手しました」

「これは歌ですか？というか、色々巻き込んでいますの。まあ、808体撃破したのです」

性格には34体を引くので774体で最低でも跡226体ですの・・・
・・・がんばればでき・・・無理ですね。

「エント76体、グレムリン124体、デュラハン48体、暗黒騎士1体、リッチ5体が現れた」

合計253体ですか？

まあ、討伐対象のリッチがいるのでやるしかないですの。

「まともにやっても勝ち目はありませんの・・・罫や絡めてで攻めますの！」

とりあえず、邪魔なエントとグレムリンを排除するですの。

準備するものは至って簡単ですの。適当な枝を切り落として、ギフトを使い、除草剤（ヒ素、サリン）を作製して枝に染み込ませ　精密射撃　を使ってエントを攻撃するだけですの。

「シッ！」

「数々のスキルによって高速で投げられた枝は、エント達の眼に次々と辺り、みるみるその身を衰えさせ、断末魔と共に死を迎えた」

これを高速で移動しながら用意しては投げてを繰り返すのです。

「ファイヤーボール」

「っ！」

バックステップで、リッチが放った火球を避けて、反撃にエントを始末するのです。グレムリンも砲撃を撃ってる来るけど弾速が遅いので問題ありませんの。

次に、触手をバネにして思いっきりジャンプするのです。そして、斬艦刀の腹でグレムリンの飛行機っぽい小型機会にたたき付け墜落させるのです。

空中でリッチが放ってきた風の紋章術は触手を犠牲にして防ぎ、下で待っているデュラハンがいるので、ゴム人間ごとく触手を伸ばして軌道を変更して別の場所……湖に着水して潜るのです。

「潜水を発動しやがりますか？」

もちろん、はいを選択ですの。潜水は水の中でも呼吸ができるみたいなので……当然、自分が作った毒は効きませんの。おっと、いけないです……早めに準備を済ませるですの。

「水中にはマーメイドとセイレーンの村があったが、アルフィミイのせいで全滅しているようだ」

すいませんですの………これも、私が生き残るためですの
で、謝りますが、後悔はしませんの。その分、何があっても生き残
ってやりますの。さて、触手を地面に突き刺してアースにする。

やっぱり、デュラハンやリッチは潜ってこないで、上で待っている
ようです。リッチは電撃系魔法を放つて来ているようですが……
……地面に突き刺した触手から電撃を逃がしているので問題
無いですの。

「反撃のお時間ですの」

既に反撃しているという突っ込みは無しでお願いするですの。さて、
アンデットに毒は当然効きませんので………物理的に攻め
させていただきますの。行くですの、ビット達!!

「ビットと言いつつ、放ったのは背中から生えた触手であった。そ
のうち一本の触手は湖の地面から潜り込み地上に少しだけ顔を出し、
情報をアルフィミィに送った」

ふむふむ、位地はここだから………こうして………
これなら大丈夫ですの!!

モンスターSide

リッチ達はまだかまだかと贅が浮上してくるのを待っていた。しかし、いつこうに浮上してこない為不信がっていた。

「いったいどういうことだ！我が配下が悉くやられたのだから絶対に手に入れると言っただろう！！」

リッチは隣にいる配下のデュラハンを蹴って苛立ちを押さえているようだ。

「それは贅本人が強かっただけのことでは？」

「わかっておるわ！だからこそその高級の贅だというんじゃ！それに、グレムリンやインプの採算は取らねばならぬ！」

そう、リッチ達が五人で必死来いて召喚した大量のグレムリンやインプは悉く殲滅された。そして、自分達は水の中では戦えない事を理解していた。

「む」

「なんじゃ？」

「来るぞ」

暗黒騎士は近場にいたリッチを付き飛ばし、自身も後退した。そして、先ほどまで彼等がいた地面を突き破り、多数の触手が表れた。しかも、触手達はデュラハン達を触手の牢獄に入れるように螺旋状の球体を形成した。そして、蛸の吸盤のように開いた穴という穴から火炎放射が吐き出されデュラハンを汚物は消毒ジャー！というように焼き上げ、美味しく喰らっていった。

「これで五体目ですの」

「た、助け……ぎゃあああああああああああ……！！！！！！」

バリ！バリ！ゴックン！と言う音と共にリッチ達は触手にのお腹に納まり、アルフィミイの糧となった。

Side Out

奇襲作戦は上々の効果ですの………問題
はこの黒騎士様ですの。かなりの実力者のようで、とってもおいし
………こほん、強そうですの。

「人間の生贄の癖にやるではないか」

「それ程ではございませんの」

「元冒険者か？」

「ただの村娘ですの」

ええ、嘘は言っていないませんの。世間一般にはただの村娘でしたもの。

「ただの元村娘に負けるとわな……魔王様に報告せねばならぬか」

「え、遠慮したいですの……」

魔王とか御免被りますの！！死亡フラグ満載ではありませんの！！

「既に満載ではないのかね？」

……
あれ、すでに満載ですね。

「というか、なぜ心の声が聞こえますの！？」

「サトリだからな」

「……反則ですの！！！！！！」

こ、これはどうにかして逃げないと美味しく食べられるフラグですの！！！！！！

「どうだ、我が陣営に来ないか？身の安全は……保障できないが、お前は我等が陣営の方が合っているだろう」

合っているというのは否定できないのです。でも、安全が保障できないのは絶対御免ですの！しかも、普通に逃げられそうに無いし大変ですの！

「絶対ごめんですの！」

「ならば、魔王様への生贄となって貰おう」

「ヤルしかないですの……………」

ここは居合いで、それも最速の一撃で決めるしか無いのです。心を読まれるなんてやってられませんの！そう、前向きに逃げるですの！

「ほう、居合いか……………その選択は間違っていないが、無駄な足掻きだな」

「五月蠅いですの！」

「アルフィミイは、触手をバネの様にして脚の裏にセットした。さらに刀身に自身の血を流した上に鞘にも血を入れてすべりを良くした。そして、アルフィミイが居合いの構えを取り、暗黒騎士は正眼に構えた」

「はっ！」

加速し一気に間合い入る、そこに黒騎士の迎撃が放たれる……………
……………これは無理、逃げる エスケープ！瞬時に三倍に加速し射線をずらしたお蔭で攻撃を回避出来たですの。そして、三倍を解除し抜刀ですの！

「なっ!?!」

刀は黒騎士の鎧を破壊して、身体に深い傷を負わせたのです。

「ぐはっ!?!」

確かな手ごたえを得たと思うのです。

「触手が自動的に捕食しようとした………
その瞬間、暗黒騎士の剣が閃き、触手を一刀両断した。」

「生きてますの………?」

「流石に効いたがな。だが、最早油断はせん。全力で参る!」

御免被りますの!しかもなんか、オデコに眼が生えてますの。

「暗黒騎士の一撃は早くて鋭い上に重い。それが高速で振るわれアルフィミイは防戦一方となる。本来なら、暗黒騎士の方が自力も戦闘経験も全てが上のため防戦すら出来ないが、先ほどの一撃により、重症を追った為に動きが鈍っている」

「無駄だ。いくら足掻こうが、お前の考えは見えている」

確かに触手を全力で防御に当てることで、手数を増やしてどうにか対抗出来ているだけです。このままじゃ、エネルギー切れで死んでしまいますの。

「お前の動きは凄いが、まるで別の身体で習った剣術を再現しているような感じだな」

白夜叉さんの動き、ですからね！

「暗黒騎士の攻撃をジャンプして避けた。そこに、剣を振り上げて来た騎士。それに対して、剣の腹を触手で強打する事により軌道を変えて助かったアルフィミイ。両者の實力には開きがある。そもそも、装備が紅桜以外ともではないので中つたらほぼ死が確定しているアルフィミイである」

「それに戦闘経験が足りないな。ふむ、触手が自動で狩っていたため、戦闘経験がほとんど無いのか……まあ、その剣術には身長も足りないようだがな」

「ええ、その通りですよ！！」

くっ、どんどん追い詰められて行きますの。何か無いのです？このまま死ぬのは御免ですよ？さっきのセイレーン達の……
・ 呪歌 がありましたの。でも、これだけじゃ足り無いのですの。そもそも、戦闘しながら別のことを考えるなんて出来ませんの。それにしても、 集団統率 を行って今の現状ですし……
・ 前は自動で十分……あっ、そうですね。どうせ、読まれるなら考えなければ良いですよ！！

「いや、無理だろ」

「ふふふ、普通なら無理ですが、私なら出来ますの！！」

「ペルゼイン！全てを任せますの！！」

「なっ！！」

腕に触手によるリボルバー式の杭打ち機を作製し黒騎士の胸にセツトですの！

「お父様直伝（嘘）！撃ち貫くけですの！リボルビング……………ステーク……………！！！！！！」

「ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！」

突き刺した所にすかさず6発全弾叩き込んでやりましたの！

「ぐはあっ！？き、貴様……………人間……………じゃな……………ぞ……………」

「ふふふ、ちよつと触手を操るただの人間ですの」

腕を空に上げて何を……………するのですの？

「く、くくく……………魔王様……………我が最……………の……………報……………告を……………」

「っ！？させませんの！」

瞬時に首を撥ねましたが……………だ、大丈夫ですの……………きつと、大丈夫……………うん、ダイジョウ……………大丈夫だと言ってくれですの！

「大丈夫！ちゃんと魔王様Lv????に報告されたから安心してね」

「冗談じゃありませんの！？しかもLv四桁ですよ！どこの大魔王ですの！」

だ、だめですの………とりあえず、落ち着いて………
………食事をしましょう！

「貴方達は鎧とか装備を食べるのです」

とりあえず、人型だけ気にしませんの。はむはむ、この頭つて結構いけますの………特に脳と目玉。当然、生理的嫌悪もありましたが、生きるために能力アップと栄養は大切ですの。これから魔王に狙われるなら特に必須ですの。

「吸収が発動しました。」

エント76体撃破 土属性耐性上昇、腕力上昇228。

グレムリン124体撃破 器用上昇372。

デュラハン48体撃破 斬撃強化240、斬撃耐性上昇。

リッチ5体撃破 知力上昇500、紋章術効果上昇250、紋章術耐性上昇。

暗黒騎士1体撃破 全ステータス上昇1000。

光合成 :ラーニング完了。

豪腕 :強化完了。

調成功率+40% :ラーニング完了。

機械操作 :ラーニング完了。

飛行技術 :ラーニング完了。

機会知識 :ラーニング完了。

チャージ :ラーニング完了。

人馬一体 :ラーニング完了。

再生能力 :ラーニング完了。

千里眼 :ラーニング完了。

読心術 : ラーニング完了。
暗黒闘技 : ラーニング完了。
暗黒闘気 : ラーニング完了。
見切り : ラーニング完了。
状態異常無効 : ラーニング完了。
能力封印 : ラーニング完了。
クラス : 暗黒騎士 経験値459826を入手しました」

「……あれ、明らかに人間側じゃありませんの。しかも、クラス増えましたの。へへ暗黒騎士ですかさっきの人ですの。」

「クラス : 暗黒騎士……暗黒闘技 と 暗黒闘気 を収めた優秀な暗黒物質ダークマター使用である。全ステータスが上昇し、呪いの装備も自由に装備できる上、光を除く全属性に耐性を持つている。さらに、闇に関しては吸収するため、非常に強力なクラスである」

能力封印 って……まさか、あの人 暗黒闘技 と 暗黒闘気 を封印していたみたいですか？なんでまた……あ、使いすぎると死んじゃうみたいですね。代償に寿命を使用するって書いてありますの。だから、能力封印で一ヶ月何時間まで決めてたんですね。そして、今月は使ってしまったと……ラッキーですの。ちなみに、私は封印する必要はありませんの。だって、私の寿命は今まで食べた者達の間も使えますから……すでにたくさんありあまってますの。」

千里眼 は10キロメートル先が見えるぐらいで、見切り は攻撃予測線が脳裏に出ると、光合成 は太陽の元で再生能力など全ての能力が上昇するしエネルギーを自分で作れるですの。」

チャージ は威力を上げていただけだし、読心術 はサトリの能力ですの。これは色々便利ですの………後は透視さえあれば、千里眼と読心術を組み合わせれば………極悪ですの。

「ふう、鎧は食べて状態異常無効を貰ったし、武器は魔剣ダウンケルハイト………幼女が身の丈以上の大剣を振り回す………萌えますの！よし、持って置く事に決定ですの」

魔剣ダウンケルハイトは 暗黒闘技 と 暗黒闘気 の制御能力を上昇させ、威力を上げるらしいですの。当然、呪われておりますの。

「では、サルベージして帰りますの」

結果、財宝とマジックアイテム+リッチの杖とかが今回の収穫ですの！

少しして村に戻りましたの。そして、今は村長に報告しているところですよ。

「無事にリッチ達を退治してくれてありがとうございます」

「気にしないでいいですの。それより………」

「はい。何でもお答えしましょう」

「この国の名前と今の年号を教えてくださいですの」

今まで気にしていませんでしたから……これからどうなるか楽しみですの。

「この国はレムリア神聖皇国と言って、主神レムリア様を崇めるレムリア教が国教です」

私が生まれた国のお隣の国ですの。やっぱり聴き覚えがあります。

「今は紋章暦655年です」

「ふむふむ……」

それから色々聴いたですの。そして、やっぱりVRMMO「欲望と魔王とダンジョン」に間違いありませんの。その322年後ですの。大魔王が再度復活するのが紋章暦666年でしたから……
……ちなみに、このゲームは人類側と魔王側を選択できて、人類は勇者を目指してプレイするんですが、魔王側は成り上がって大魔王になるのが目的ですの。そのために、ダンジョンを作って人類側を苦しめたりとても面白いのですの？もちろん、それでポイントが溜まって強化やクラスチェンジにも使えますの。

え、私ですか？私はもちろん魔王側でしたの！これでも課金とネットカフェを駆使してネタ武器を使って魔王にはなりましたの。大魔王にはクラスチェンジがいつでもできたのですが、ダンジョン作るのが楽しくて……プレイヤー数十万人以上いる中の廃人……
……廃神さん方からラストダンジョンとか隠しダンジョンとかこのゲームの最大の難関は私のダンジョンだといわれてま

したの。確か、階層を6666層まで作ったのでした。ちゃんと計算して、勇者が1階層から真面目に攻略したら純長に力が手に入るように作りましたの。そういえば、幼馴染の人が必死こいてやってましたの。クリアー出来たらなんでも言うこと聴いてあげると言ったら本気で打ち込んだみたいですが……まあ、維持になつて古今東西のモンスターやトラップを仕掛けたので、廃神さん達もクリアーを目指して二年で4000くらいだったかな？LV上限解放とパッチ待ちと言われたダンジョン。SAOを読んだら、あの人以上の物を作りたいと思ったせいです。

「村長さん、ありがとうございます」

「ああ」

「あと、リーゲル王国はございますの？」

「はい。ここから東の街道を進めば行けますぞ」

「ファタリテートは存在しますか？」

「確か、リーゲル王国に存在すると言われている場所ですな」

「ありがとうございます。それでは、これで失礼しますの」

「お気をつけて」

次の目標はリーゲル王国ファタリテート。標高2000メートルを越える場所に存在する街で、そこは転生や特殊クエストの場所でした。最大の特徴は転生前の装備やアイテムを預けておけること。鍵は暗証番号と問題を解けば大丈夫です。ひよっとしたら、何かあ

るかもしれませんが。行くのも道を知っていれば簡単ですの。

村から離れて誰もいない場所に来たですの。もちろん、目的はフ
アタリテートに転移する事。それに実証ですの。

「デザイナーよ、識別コード3691228177。契約者魔王ア
ンリ＝マンユが命じる。転送コード1133997726845」

『識別・・・・・・・・・・契約者魔王アンリ＝マンユと認証。転送コー
ド受諾・・・・・・・・ファタリテートと認証。なお、エネルギー不足及び
メンテナンス不全のため転送は一度きりとなりますよろしいですか
？』

当然、Yesを押すですの。

『受諾・・・・・・・・・・ファタリテートへのゲートオープン。良
き旅を・・・・・・・・・・』

そして、目の前に光り輝く渦が現れたので中に入ると転送されまし
たの。

転送された先はギリシャ神話に出てくるような神殿ですの。しか
し、ぼろぼろですね？さすが、放置されただけはありませんの。

ダンジョン関係ですの。

「あれ、スキル熟練度の上限が無くなってますの。パッチでもあつたのですの？」

『アルフィミー様、ティリア様よりメールが御座います。いかがなさいますか？』

当然、古い順から見るを選択しますの。幼馴染の手紙ですから。

『アンリがこの手紙を見ている時は二通りあります。まず、アンリが死んでいなくて、どこからか繋いでいる線。これなら死んでください。そして、このゲームはもう直ぐサービスを終了します。アンリの迷宮は現在6664階までクリアしました。明日、サービス終了一日前に挑みます。あと一つは噂なのですが………
・書くのをやめておきます。明日の報告を楽しみにしてください
・9年の恨みは多いです』

クリア………そこまで行くななんて凄いですの。何より、9年もやってたなんて思わなかったですの。とりあえず、次の手紙をあげましょう。

『アンリ、どうやら二通り目に成功したようですね。このメールはサービス終了後から320年がたった世界から送りました。私はこの世界に転生したようです。それも、貴方のあの鬼畜な迷宮をクリアしたためのようですね。6665階でラスボスをなんとか倒して、6666階についた瞬間、サーバー切断が起きたのか分かりませんが、私は光に包まれ意識を失いました。次に目覚めた時は赤ん坊になってました。そして、しばらくして私はここでこのメールを書いています。そして、どうやら私はこの世界でも一人になるよう

です。というのも、両親は殺され、家は没落しました。一人になった私は奴隷商人に売られたのですが、どうせならと転送コードをやってみると起動したのでここに来ました。それから、書き換えを行い私はクリアした時の約束の場所で待つことにします。このメールを見て、私に生きていて欲しいなら来てください。私には一人でこの世界を生きる意味も理由も無いので路銀がつかいたら飢え死にするとおもいます』

「ちよっ！何考えてやがりますの！！！相変わらずの被虐属性……
……このM娘め！？あれ、でも、転生前のお金とか持ち出したら平気なんじゃないですか？」

『P S . 私の装備やお金など全アイテムはアンリのBOXに入れておきました。好きに使ってください』

「ふざけんな!？」

ふふふ、あの馬鹿娘は最調教の必要がありそうです……………
……………とりあえずボックスあけて……………
……………何これ？また手紙？

『ハロー、行方不明のアンリ君。君の死亡が確認され、ネットで話題になったよ。追悼式典とかなんとかいって廃神全員で君のダンジョンクリアを目指したんだ。テイリア達と9年……………いや10年かかったよ。なんてもん作ってんじゃゴラア！まあ、いいラスボスに挑んで俺たちはテイリアを残して全滅した。あのフザケタ死んだら強制転送のせいで時間の余った連中は自分の全てのアイテムをお前のボックスに入れる事にしたらしい。どうせ消えるならこんな偉業をなしたテーマの手向けにクレテヤルだつてよ。というわけでよ、最終的に参加した廃神プレイヤー238人の全アイテム

をくれてやる。だから、共よまたどこかで合おう』

なんか、凄いことになったみたいですよ。こんな手紙が300通近くはいつてますの。とりあえず、全部後で読むとして全部もって行くですよ。馬鹿娘を迎えに行かなくてははいけませんの。

「ゲートオープン：フェスティア王国ガイスト」

そして、私は祖国の都市に転移したですよ。

4話 魔王にばれたですの(後書き)

アルフィミィルゼーケブレヒト

種族：人間

ベースレベル：65

ジヨブレベル：45

1st クラス 職業：生贄

2nd クラス 職業：暗黒騎士

3rd クラス 職業：魔王

装備

武器：紅桜＋魔剣ドウンケルハイト

防具：鬼の着物

EX特殊能力：触手操作、吸収、自己進化

5話 使い魔が来ました

さて、フェスティア王国は王と貴族が支配する国で、紋章術の開発が盛んなのです

が、利益を王族と貴族で独占し腐敗している末期の王国です。禁術の開発から人

体実験までなんでもござれのとんでも無い国ですの。

次に、学術都市ガイストは紋章術の開発に盛んな都市ですの。都市自体は人口は“

認められてる”人が8万人、奴隷やモルモットが10万人近くいるそうですの。入れ替

わりが激しくて詳しい事は判らないらしいですの。そして、全ての周りは堅牢な城壁

で囲まれ内外とも厳しい監視がつけられていますの。

「転送完了……………ずいぶん変わってますの」

塔や研究所、牢獄らしき物が多数作られ、お世辞にも綺麗とはいえない魔窟になっ

ていますの。昔は魔族が跳梁跋扈していた綺麗な都市でしたが……
……とりあえ

ず、約束の場所に急ぎますですの。

転送された塔の上から降りる為に、フアタリテートから持ち出した
闇の羽衣を身に纏

い姿を隠しますの。闇の羽衣は装備者を影のようにするので隠密性
がバッチリです

の。

「とっっ！」

垂直に塔を駆け下りて目標地点に向かいますの。

少しして付いた場所はスラムのような所で、汚物がそこらじゅう
に転がっていて、と

ても生活できるような場所ではありませんの。臭いも臭くて堪らな
いですの。まあ、私

は壁走りでどうにかしているのですが、臭いはどうしようも無いで
すの。

「あの辺りが……目的の場所です……」
「？」

前は私が経営していた魔道具店で、ダンジョンの入り口だったので
すが……完

全に廃墟ですの。

「テイ……リア？」

その入り口に8歳くらいの綺麗なプラチナブロンド（銀）な薄汚れた
ガリガリの幼女が

ぼーと座っていたですの。

「……だ……れ……」
「？」

「メール通り来てやったのですが……この格好
なら仕方ありませんの」

完全に10歳の女の子ですの。

「……ま……さ……」
「……か……アンリ？」

「正解ですの。気がついたら女に転生していましたの。それも、こ
んな格好で……」

「・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・私の・・・・・・・・せい・・・・・・・・・・？」

「え？」

「次の転生弄った・・・・・・・・女でOGのあるふいみいになるように・・・・・・・・」

「こいつが犯人ですよ！！！！」

「なんて事してくれやがりますの！！！！」

「いたひゃい~~~~」

ついでに色々説教してみたですよ。

一通り説教が終わったので、色々聴いてみると爆弾発言がぎましたの。

「アンリ・・・・・・・・あのね・・・・・・・・結婚して・・・・・・・・」

「駄目ですよ」

だって、今は女同士ですし、前は幼馴染といっても年が結構離れていたのでロリ」

ン指定くらうような感じですよ？妹とはみれるんですが・・・・・・・・..
.....いえ、可愛いので

ど・・・・・・・・・・・・・・・・もっ、無理・・・・・・・・・・・・・・・・」

くっ、どうすればいいのです！《読心術》でも本心のようですし！

「お、可愛い穰ちゃん達じゃねえか」

この忙しいときに浮浪者どもが、色欲のこもった目で私達を嘗め回して来ますの。し

かも、裸のティリアを汚らわしい目で・・・・・・・・・・・・・・・・何かイラつきますの。

「俺達と気持ちいいことしようぜ？嫌な事忘れさせてやるぜ？」

「ああ、天国のつれてってやるぞ〜」

じりじりと近づいて来る浮浪者達。

「ふざけ」「いいよ」「え？」「好きにしていよ」「ティリア!？」

「別に生きてても意味ないから・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ふへへへ、たっぷり楽しませて・・・・・・・・・・・・・・・・」

だめだ、ティリアを含んでこいつら全員本気ですの。そして、ティリアに手がかかると・

・・・・・・・・・・殺してたくまりましたの。

「あっ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おいっ！」

ティリアを抱き寄せて男共から離しますの。やっぱり、こいつ等にティリアを渡すのは

ゴメン被りますの。

「穰ちゃんも一緒にしようぜ？」

「ごめんですの。そして、ティリアは渡しませんの」

「貰ってくれるの？」

「……………わかりましたの……………好きにするといいですの……………」

「うん、好きにする」

本当に自殺とか自暴自棄になられるのは困りますの。この世界で一人だけの知り合

いなんですから。それに、私もなんだかんだで好きですから。

「何ごちゃごちゃ言ってやがる！早くこっちにきやがれ！」

「嫌です。私はもうアンリの物……………だから……………私の肌を見たあなた達は死ん

てください」

「……えっ？」「」「」

テイリアから圧倒的なマナが放出されました。

「アナスタシア………超魔王テイリアの力を見せてあげます」

「……は？」「」「」

超魔王？バールですの？まさか、あの塔って管理者が弄りましたの？

「滅びよ、《カタストロフィ》」

テイリアの手の紋章から放たれた漆黒の光がスラムもろとも消滅させましたの。

「あははは、どうなってますの？」

「まだ力が安定しません。でも、アンリを守れるなら構いません」

「テイリア、説明して欲しいですの」

「はい。6665階にいた超魔王を倒したら超魔王になってました。そして、この紋章、

崩壊の紋章を手入れたのです」

どうやらゲシュタルト崩壊させて、構成物質に変更し、その構成物質すら崩壊させて

いくといつとんでもない紋章ですの。

「あ、管理者側が色々ダンジョンを弄ってましたよ」

「まあ、それはいいのですが、とりあえず装備を返しますの」

「はい。こっちもお願い」

契約書ですね。とりあえずOKと。

「超魔王アナスタシアを使い魔にしました。超魔王アナスタシアを
奴隷にしました」

「え、これはなんですか!」

「飼ってて言いました」

「……………まあ、いいですの」

それより、問題はスラムとはいえ一區画を消滅させてしまったこと
ですの。

「逃げますよ」

「はい」

多少精神も安定したきたようなので、ティリア……………ア
ナスタシアもきつと大丈夫で

すの。さて、これからが勝負ですの。アナスタシアの力も前ほどの力も無いでしょうし

、大魔王が復活するまで力を蓄えますの。

6話 最強装備ですの

ハロー、学術研究敏の一区画を破壊して逃亡した触手魔王しよ・
・幼女アルフィミィ㊦ゼーケブレヒトですの。みんな元気ですの
㊦?こちらはパソコンが逝かれて涙目ですのよ?おっと、これは別
人でしたの。皆さんも気をつけるですの。

さて、私達は今フェスティア王国ガイストの宿屋ですの。え、何
故まだここに居るかって?そんなの、眠かったからに決まっています
の。衛兵さん達は外を調べていますし、何よりこのガイストでは爆
発なんて当たり前らしいですの。No Problemですの

「んっ、んん………」

「さて、今の間に私のデータを見るですの」

アルフィミィ㊦ゼーケブレヒト

種族：人間

ベースレベル：65

ジョブレベル：45

クラス

1st 職業：生贄

クラス

2nd 職業：暗黒騎士

クラス

3rd 職業：魔王

武器

右手：紅桜（耐久：23 / 352）

左手：魔剣ドウンケルハイト（耐久：230 / 600）

防具

上半身：鬼の着物（耐久88：300）

下半身：鬼の着物

肩：闇の羽衣（隠匿、隠蔽、隠密）（耐久：200 / 350）

足：シューズ（耐久：2 / 45）

装飾1：

装飾2：

装飾3：

装飾4：

EX特殊能力：触手操作、吸収、自己進化

こんな感じですよ。

さて、少し説明を入れます。耐久力は無くなれば消滅します。闇の羽衣についているのは、ルーンです。この世界では紋章です。ゲームではルーン（紋章）をあらゆるアイテムに1〜5個、刻む事が出来ました。だから、闇の羽衣には3つのルーン（紋章）が刻んである事になります。

さて、私の転生前のキャラクターは、筋力器具用<幸運の生産超特化型です。職業も、アルケミスト、ブラックスミス、ルーンマス

ター、エンチャンター、モンスタークリエイター、ダンジョンクリエイター、トランプマスター、ドールクリエイターという後衛にもなれない非戦闘員ですの。えっ？戦闘出来るだろって？そんなのモンスターに任せられた方が速いのですの。

後、私がぶいぶい言わせられていたのは隠しクラスのアーティファクトクリエイターのお陰ですの。入手条件はアーティファクト3000個のデータを所持して解析する事ですの。古代遺物と言われるアーティファクトを3000という膨大な数で、しかも本気で組まれたプログラムを解析しないといけないという馬鹿仕様ですの。私、ダンジョン放置中にせっせと解析していましたが……いろいろな方に借りたりして貸しを作りましたの。時にはダンジョンに挑んできた連中から頂いたりもしますが……私のダンジョンにはアーティファクトを持って来るなどという確言まで出来るほどでしたの。アーティファクトを献上しに来たお方にはもれなくアーティファクト装備で固めたバイオキリングドール達がお出迎えですの。え、イメージ？ご想像にお任せしますの。ただ、青い人やお父様とかいっ人には負けてませんの。(10の研鑽は無駄じゃない！多分)

さて、私が転生時所持する事に選んだスキルはアーティファクト制作と修復、生産確実成功、モンスター生成、生体人形制作という生産スキルのオンパレードですの。

「んにゃ〜」

そろそろ現実逃避が出来なくなってきましたの。

「ん、おはようございます」

「はい、おはようアナスタシア。」

「んんんん」

裸のアナスタシアが私のまな板な胸に擦り寄って来たですの。そう、裸で。いえ、私は手なんか出してませんの！だから、その110をプッシュした電話からゆっくりと切るを押して、電話線を抜いて手を離すですの！だいたい、私とアナスタシアは女の子同士でそういうのは出来な．．．．．レズ？確かにそれなら．．．．．って違いますの！だから、電話から（ry）！えっ、だいたい触手で感覚共有して男性器を作ればいいじゃないかって？確かにそれなら出来すの！？貴方は素晴ら．．．．．ああ、押しちゃった．．．．．
．．．．．こうなれば．．．．．はい、嘘ですの。

「アナスタシア、これはどういう事ですの？貴方のベットは隣なのに、どうして私のベットに裸で潜り込んでますの？」

「一緒に居たいの．．．．．駄目．．．．．かな．．．．．？」

くっ、裸シートに涙目で上目遣い！なんて凶悪なコンボですの！しかも、幼い銀髪美少女．．．．．勝てようか！いや、勝てないですの！？しかも、心の中は、（一緒に居たい。捨てないで、好き、犯して、目茶苦茶にして）．．．．．最後はどこの子ですの！？明らかに犯しいですの！？

「アルフィミイ？」

「いえ、何でも無いですの。気にしたら負けですの．．．．．うふふ」

「眼が虚だよ？あつ……………／／／」

取り敢えず、昔より馬鹿みたいに美幼女化して可愛くなったアナスタシアを撫で回していると、誰かやって来ましたの。

「早朝に失礼します。守備軍のものですが……………」

「……………」

「……………失礼しました」

長い沈黙の後、ボタンと扉を閉め何事も無かったかのように女の兵士さんは去っていかれ……………まずいですの！？

「アナスタシア！」

「……………／／／」

あれ、この子、びくびく痙攣してますのよ？そして、あそこから透明なのが……………逝っちゃってるのですの！？

「言い訳も出来ない……………orz」

一刻も早く、目的を完了して出て行ですの！

朝食を食べ終わり、部屋で改めて装備を確認。課金アイテムも充分ございますの。

例えば、戦闘教範・極意（base experience point）、職業技術教範・極意（job experience point）。これは経験値を10倍するという優れたもので、お値段10冊セットの24時間有効でなんと5000円ですの！それが400冊20万円〜

例えば、身代わりの人形。死んでも自動復活できる優れたもの。1個10000円ですの。521個で58.1万円〜

例えば、エリクサー（HPMP全回復）5000円を2657本で132.85万〜

例えば、特級・生産効率上昇（80%）の薬が3000円で400個で12万〜

例えば、巨大化の薬が10000円で貴方も15Mの巨人になれますの！これが36個で3.6万円〜

他にも、モンスター生成速度上昇など沢山ありますが、基本的にその気になればゲーム内でも作れるアイテム達ですの。当然、調合法など必要技術は極意クラスですの。

さて、私が一番で残っていて欲しいアイテムは……あ、ありましたの。じゃじゃーん、ジエネシスワンドですの。ガチャクジで手に入る最凶最悪の概念兵器！入手方法は毎月行われるガチャガチャ（千万分一）に混じるアイテムを24個集めて特殊クエストをやって作りますの。そのせいか、性能も馬鹿で能力1個目は固有

結界（自分の世界）を生成可能で、アチャ男のアレもできますのよ？二個目は、多重スペルで、弾幕が張れますの。三つ目は自動展開障壁（ぶっちゃけATフィールド？）。四つ目はマナの生成（制限有り）と増幅。五つ目は一ヶ月に一度マナを放出しないと爆死ですの。六つ目は不明ですの。五つ目はアボンですが、基本的にふざけたチートへ兵器ですの。ちなみに、ジェネシスワンドの外見は、六対の羽の様な紋章（ポリ赤の紅の姫の羽）の上にクリスタルがある2メートルくらいの杖ですのの。

「出た、チート兵器」

「一応チートでは無いのですのよ？」

「他にも持つてるよね？」

「ええ。でも、流石にこれほどのアイテムでは無いですの」

あるのはMVPドロップ、腕輪：ウロボロス（マナを循環させる）、指輪：カーバングル（全魔法反射、範囲は無効化）、ペンダント：不死神（物理攻撃ダメージ9割減少、紋章術ダメージ5倍、HP回復術反転、状態異常完全無効）、靴：スレイプニール（無限加速、HP・MP2割増強、空中疾走）というのがMVPから手に入れた宝珠で作ったアーティファクトですの。

「どれもチートすぎると思うの……………材料も凄いの……………」

「いえ、材料なんてモンスター作って素材の部分を剥げばいいですの。それに、魔王側の神は倒しても問題ないですし、敵側の神も当然の如くですの」

「さすが魔王です・・・鬼畜・・・」

防具は適当の物でしたの。とりあえず、誰でも使いやすいのを用意しましたの。他にも概念級や伝説級はありますが、ダンジョンにありますの。

アルフィミィルゼーケブレヒト

種族：人間

ベースレベル：65

ジョブレベル：45

1st職業：生贄

2nd職業：暗黒騎士

3rd職業：魔王

武器

右手：紅桜（耐久：23 / 352）

左手：魔剣ドウンケルハイト（耐久：230 / 600）

防具

上半身：ベロオウルフ・真紅（耐久3000 : 3000）

下半身：ベロオウルフ・真紅のスカート（耐久3000 : 3000）

肩：闇の羽衣（隠匿、隠蔽、隠密）（耐久：200 / 350）

足：スレイプニル（耐久：4682 / 6000）

装飾1：ウロボロスの腕輪（耐久：2300 / 6000）

装飾2：カーバンクルの指輪（耐久：3230 / 4000）

装飾3：不死神のペンダント（耐久：5630 / 8000）

装飾4：

EX特殊能力：触手操作、吸収、自己進化

装備変更完了ですの。

「あれ、その服……なんでそっちなのか？」

「こつちの方が露出が少ないからです。それに、これから接近戦だから……似合ってますか？」

「似合ってる」

そう、今の格好は父上のベーオウルフの様な感じの女性版です。むしろ、ゲームで配信されたネタ装備です。性能は何故かオリハルコンのフルプレートアーマークラスという意味の解らないアイテムです。流石、アルトアイゼンです。

「これからどうするの？」

「食事中に聞いた噂だと、スラムだった区画にダンジョンの入り口が現れたらしいです。そっちが気になります」

「アルフィミイのダンジョンじゃないかな？」

「そうですね。それと、このアイテムは何ですか？」

「アイテムボックスにいつの間に入っていたアクセサリ……
……名前は迷宮王の証です。」

「それは、確か……管理者がアルフィミイのダンジョンを超魔王とかを置いて正式に使う時の代価のプレゼントです」

「へ」

ダンジョン自体は死んだから別にいいのですがね……

このアクセサリーの効果はダンジョンのデータの読み込み解析する事。さらに、攻略したダンジョンや自作のダンジョン内なら自由に移動可能という能力と、さらに攻略したダンジョンを支配できるし、その構造を自由に変更できるみたいです。

「凄い能力ですの」

「とても、便利？」

「ええ。ちょうどいいですの……アンリの迷宮のデータ表示ですの」

「Now Loading……」

ダンジョン名：アンリの迷宮。

全階層：6666階

真紅の月：稼働率2.3% 損傷率97.7%

蒼穹の月：稼働率1.5% 損傷率98.5%

魔物の数：99.999.452/100.000.000匹

侵入者数：231人

攻略者数：1人」

「月が2つとも稼働率がやばいぐらいですの」

「二百年は整備も何もしてないのにずっと稼働してたからじゃないかな？」

「その通りですの」

真紅の月はモンスターを生み出しダンジョン内に転送したり、死んだ魔物や人、アイテムをマナに還元するアーティファクトですの。

蒼穹の月は自身でもマナを生み出しながら、ダンジョン内のマナを吸収し増幅循環させたり、アイテムを作るアーティファクトです。この2つはお互いにリンクしていてマナを循環させ、増幅しているんです。元は、配布されたダンジョンコアですが、魔改造しましたの。

「入ってどうするの?」

「2つを回収してこの都市から離脱ですの」

「諒解」

もちろん、まともに攻略する必要も無いので時間は速いと思いますの。

7話 ネット武器ですの

颯爽登場、銀河美幼女まお……げふんげふん。改めて、皆様の横に這い寄る触手魔王ことアルフィミィ＝ゼーケブレヒトですの。あつ、本当にぱつくんちよ逝くかもしれないので気をつけるといいですの。

父上の女性版（ネット画像で金髪だけど落ちてた奴）を来た私と、ゴスロリファッションのアナスタシアと二人でまずいご飯を食べた後、ダンジョンに向かうですの。えっ、明らかにダンジョンに潜る格好じゃない？No Problemですの。装備を整えた今なら例え紋章ルーンが無くても楽勝ですの。

という訳で、スラムの入口に来ているんですが………K E E P O U Tと書かれた黄色テープで通行止めですの。その先には砂浜のようなのが広がっていますの。

「ここは現在通行止めだ」

「ダンジョンが見付かったと聞いたですの」

「入れないんですか？」

「ああ。冒険者でも無いようだし、悪いがここからは入れんぞ。子供には危ないからな」

この都市にしては、まともな兵士さんですの。ちなみに、冒険者は基本的に15歳以上ですの。最低でも13歳からですの。9歳の私や8歳のアナスタシアには無理な話ですの。戦力的にCランクでも負けませんが。

ちなみに、ステータスはE〜Sまで有りますの。Eが一般人、Dが近衛兵とかの強者、Cが英雄、Bが勇者やドラゴンとか、A魔王と神に竜王、S大神と大魔王、EX測定不能（超魔王とか）くらいですの。ちなみに+・-はつきますの。

ギルドのランクはPTで倒せる値が基本的にランクになりますの。

私の個人データはD-ですの。装備や触手でブーストすればB-辺りで、下級勇者クラスですの。アナスタシアも全部含めて平均Cくらいですの。ただ、崩壊の紋章ルンを使うとAくらいだと思いますの。

ステータスは一部引き継いだけけですの。熟練度とかはそのままでから安心ですのよ。と、いっても、あのゲームは実際にリアルな工程を求められるので大変ですよ？やり方は、頭の中に懇切丁寧にチュートリアルのように表示されますの。

「カードは出しちゃ駄目だよ？」

アナスタシアが小声で、気付かれないように注意して来ましたの。

「分かってますの」

300年近く前に発行された魔王側の冒険者カードを出すかどうかは解りますの。

「ほら、さっさと行け」

「ハイですの」

「失礼します」

兵士さんに怪しまれないうちに、その場を去って別の入口に向かいました。

それから私達が向かったのは、フェスティア王国内にある古代遺跡ですの。

目的は古代遺跡横にある地下へと続く配管ですの。

「ここから入れるの？」

「超特急ですの」

1メートルくらいの幅がある配管を押すと、一部分が破壊されて崩れ落ちましたの……は、外す手間が外れましたの。

「だ、大丈夫だよね？」

「きつと平気ですの」

「う、うん。信じる」

崩れて入れるようになった、配管に飛び込みましたの。

「「きや〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！」」

滑り台のように左右に激しく揺られ、時には上下逆転され身体箇所々が痛くなって来た時、ようやく着きましたの。腰を打ってとても痛いのですの。

「な、なんだお前達は！」

「このくそ忙しい時に餓鬼だと！」

あれえ？銀色の鎧を着た人達と、ローブの人達が剣や杖などの様々な武器を構えていますの。反対側には斧を振りかぶった多数のミノタウロスがいますの。

「ちっ、間に合わねえ！」

「逃げる！？」

「ブモオオオオオオオ！！！！」

「3メートル以上の巨体から振り下ろされる斧は、重力も相まって解き放たれるととてもない破壊力は少女二人が死ぬのを皆が想像した」

「おいたが過ぎますのよ？」

「嘘……………だろ……………？」

「ここにいる二名を除いた者としてその言葉は、心の底から同意していた。アルフィミイは片手でランクの魔物であるミノタウロスの斧を素手で受け止めていたのだから」

「悪い子は……………みつくみくにしてやんよ、ですの」

「そういつた瞬間、アルフィミイは斧を砕いて、ミノタウロスの懐に入りアイテムボックスから取り出した水々しい長ネギ（剣）を一閃。ただそれだけで、強固な外皮に守られたミノタウロスの上半身と下半身は分断され、絶命した。そして、LVUP音が鳴り響いた」

「あつ、Lvが上がりましたの」

「……………ありえねえ!!!!!!」「……………」

「ぐ、グモオオオオオ!!」

あら、他のミノタウロスが膝をつけて泣き崩れていますの。仕方ありませんの、許して……………美味しそうですね。よ、涎が……………止まりませんの!

「もえろくふあいあーすとーむ」

やる気の無いアナスタシアが放った紋章術の炎の嵐で、残りのミノタウロスがコンガリと焼けて良い匂いが漂って来ますの。

「切り分けますの」

実は、今朝初めてご飯食べたのですがマズすぎますの。昔は慣れていたので平気でしたが、魔物を食べるようになってみると前のが耐えられませんの。だって、粉ミルクのような味しませんのよ?この頃ゲームでよくある食事問題ですの。といっても、果物とか素材は味があるのでなんとかなるですの。それに加え、魔物の肉、特にこのミノタウロスは霜降り和牛のような匂いがしますの。そして、ネギソードで切り分けたら、なんと、ほんのりと焼いたネギの香ばしい香りがついて素晴らしいですの!?食材ネタ武器に新たな境地ですの!

「ん、美味しよ?あ〜ん」

「あ〜ん」

フォーク（伸縮自在な槍）でブロック上のミノタウロスの肉を突き刺して、アナスタシアが食べさせてくださいますの。肉は脂っこくも無く、絶妙な味わいですの！

「……………」

「はっ！お前等、どうやって入った！」

「あそこからです……………はむはむ」

肉ウマーですの。取り敢えず、配管を指差してさしあげますの。うまうま。

「君達は人間なのか？」

「人間（魔王）です……………あむあむ」

「うん、人間（超魔王）」

まあ、能力的にはLv低すぎてダメダメですの。あっ、アナスタシアはもういいですの？なら、頂きますの。

「しかし、その実力は子供がだせる力じゃないぞ！」

「アーティファクトの力だよ。はい、追加」

「ありがとうございます」

アナスタシアが私の目の前にどんどん肉を持って来てくれますの。

「アーティファクトだと！」

「私達は全身アーティファクト装備」

「ちよつｗｗｗ」

「どこかの大貴族か王族ですか？」

「貴族では有ったよ？」

アナスタシアは貴族生まれですね。そういえば、没落とかいってましたの。

「おい、どうする？」

「依頼はダンジョンの探索だろ？」

「しかし、俺達だけの力じゃ……………」

これからの方針ですか？

「それなら、食べながら決めたらいいですの」

「確かに。でも、いいの……………か？」

「凄い勢いで消えてるな」

「食べたく無いなら……………」

「食べる」

「ああ」

皆様、がつつきすぎですの。えっ、人の事言えない？確かにその通りですの。

「うめえー」

「これが金貨100枚の美味さか」……………

「幸せ……………」

ミノタウロスの肉ってそんなにしたんですね。さすが、強者から英雄クラスの魔物ですの。

それから、少しして、ミノタウロスを食べ終わってから、冒険者の方々がやっている剥ぎ取りを見様見真似で行い、素材（斧、角、皮、骨など）を手に入れましたの。

「それで、お嬢ちゃん達はどうするんだ？」

少し調べてみますの。さとりん起動ですの！《読心術》On。

「どつとは？」

「これから地上に行くか、地下に行くかだ。一応、帰るなら念の為

に送ってやるよ（安全な道も知らないだろうし、何か有ったら目覚め悪いからな）」

「そうよ。ここは危ないんだからね？（私達より強いみたいだけど、こんな小さな子だけじゃ心配だわ）」

「もし奥に行くならご一緒しましょう（罨や調査などは、僕達が先に行すれば危なくないですし、あの火力なら、後衛の護衛と殲滅を頼めますし、横湧きの注意だけに済みますから、出来たら一緒に下に行くのが私達的にはいいですね。メンバーという事にしてしまえば五月蠅い兵士達は黙らせて、ダンジョンから連れ出せますし、調査が捗ります）」

「……（さっきの美味しかったな）」

基本的に優しい人達ですの。最後の人には同意しますのよ。そして、私達の答えは決まっていますの。

「下に行きますの。御一緒してよろしいのですの？」

「ああ」

「もちろんです」

「よろしく」

アナスタシアも問題無いようなので、即席の6人パーティーですよ？懐かしいですよ！

「んじゃ、一時とはいえ仲間になるんだから、自己紹介と行くか。

俺はガイツ。メインクラスは守護騎士。所属は自由騎士団だ」

自由騎士団はディザリアに存在する国に影響されない騎士団です。国境無き医師団みたいな感じの騎士版で、主な仕事はモンスターの討伐ですので、基本的に冒険者の方がなりますの。

「僕はグライ。風術師だ。よろしくな」

「私はレイア。治療術師にね。だから、怪我したら言ってね」

二人は紋章術師ですのね。風専用と治療専用の特化クラスですの。

「よろしく(ですの)」「」

「この三人で基本的に組んでたんだ。で、そのちみっこが臨時パートナーだ」

「………リリ………アサシンとスナイパー………
?武器はこれ………」

リリと名乗った私と同じくらいの女の子が持ち出したのは、自分の身長を超える折りたたみ式の渦々しい大弓と双刀の小太刀を持ち出して来ましたの。どちらも、ルーン(紋章)が5個刻まれたアーティファクト………まさか。

「?」

わざとらしく小首を傾げつつニヤリと口を一瞬だけ変えたりり。お仲間ですのね。

「虐殺者の魔弓デザイナー」

「……………」

弓使う変わり者の暗殺者で、魔王側にとって最悪の相手として有名でした。ジエネシスワンドと同じ概念クラスと言われる弓ですの。それを持った暗殺者のプレイヤーがたった一人で、侵略中の大規模な魔王軍を壊滅させたとかで虐殺者と二つ名がついたとか……………
・ 恐いのです。隠密と狙撃に特化しつつも近接戦闘もござれの化物ですの。

「まあ、仲良くしますの」

「うん」

「……………（しく）」

こうして、私達は最深部へと向かったのです。

8話 P90TRフルカスタム

皆様、おはようございますの。現在、冒険者さん達と自分の迷宮に潜っているアルフィミイですの。現在の階層は999階層ですの。次の階層には当然ボスがいますが……私の記憶では、ネタにしたと思いますの。確かきぐるみがボスだった気がしますの。

やっと999階ですの。冒険者さん達に付き合っているせいかなさんのような歩みですの。暗黒闘気の練習がてら、アイテムボックスからリボルバー式の杭打ち機リボルビング・ステークがセットされたベーオウルフの籠手（暗器扱い）を装備して前線に出ていますの。敵は5メートルのゴーレムさんですの。

「ちがうぞ、そこは右からだ」

「ふむふむ、チェリオ！」

奇策士さんの掛け声と共に、暗黒闘気を纏わせたりボルビング・ステークを叩き込むと、紙を貫くようにモンスターの装甲を無視して刺さり、ドゴンという音と共に陥没して絶命しましたの。

「変な威力だよな。ゴーレムの物理装甲が紙のようだ」

「楽勝」

「敵じゃないね」

ガイツ、レイア、グライは遠い目をしてますの。

ちなみに、隊列は前衛（ガイツ、私）、後衛（レイア、グライ）、
殿リリですの。

「次はボスか？」

「そのはずですよ」

「……敵は確かきぐるみの変な鼠？」

「あれって、強かったよね」

「君達は知っているのかい？」

ふふ、この私が悪乗りして作り上げた生体殺人人形ですよ？ドール
ルマスター舐めてはいけませんの。

「文献で見た」

「うん」

「へ〜」

「何してる、行くぞ！」

さあ、稼働しているかが分からないけど、楽しみです。

記念すべき1000階層の構造は簡単で、遊園地です！

「な、なんだこれ？」

「楽しそうだけど……」

「壊れてる」

そう、ジェットコースターのレールは途中で折れて、メリーゴーラ
ンドの馬は闊歩し、観覧車は倒れています。

「あっ」

「タンっ、タタタタタタタタと軽い音と共に飛来した多数の
弾丸が、レイアに直撃し、レイアのローブに空いた多数の穴から血
が滝のように噴出しレイアは倒れた」

「レイア！」

売店だったであろう場所から、煙を上げるPORTRフルカスタム

を構えた着ぐるみですの。見た目には、犬だかネズミだかよく分らない茶色の生き物で、緑色の帽子を被っており、赤い蝶ネクタイを締めていますの。外装を超アラミド繊維で、指向性マイク・サーマルセンサー・暗視システムなどを組み込まれてる優れたものですの。

「もふ？……………もふっ……………」

「治療は私がしますの」

「すまねえ！」

だって、私を見てポン太君が固まっていますのよ？主と解っている様ですの……………私がいたら邪魔でしょ？それより、気を失っているこのレイアさんですの。このままじゃお亡くなりになりますの。

「エリクサーで万事かいけ……………じゅる」

味見ぐらいいいよね？いいと決めましたの！まず、やる事はエリクサーを喰らうですの！飲むでは無く、喰らうで正解ですの。とりあえず、20本くらい。

「《生命の液体》……………ラーニング完了

《賢者の石》……………ラーニング完了」

えっ、《生命の液体》は私の体液であらゆる傷は完全回復し、病気もたちまち完治ですの？賢者の石は……………私そのものが賢者の石……………どこかの鎧の弟さんですの！！くっ、確かにエリクサーは賢者の石が材料になっていますが……………術がとんでも無い事になりそうですの。っといけない、早く治さなく

ては………周りはだれも見えてませんし、GOですの。

「ちゅ、れる、れるゝはむはむ、ちゅるるゝゝゝ」

レイアの血液は美味しいですの。ただ、処女じゃないんですのね。いらぬ情報が沢山入ってきますの。血は知識の媒体でもあるんですのね。

「治療術師………ラーニング完了」

「後は………ん、っ！」

手首を噛み切つて、穴の開いた場所に掛ければ終わりですの。逆再生みたくにどんどん治って行きますの。弾丸はマナで生成されているので、体内に残る事は無いので心配ありませんの。

「うん、呼吸も安定して来たし、問題はありませぬの。さて、あちらは………」

「ちくしょう！」

「僕の紋章術があたらない！」

「さすが元ゲリラなの」

ポン太君に翻弄されてるようです。色んな場所に素早く隠れて狙撃したり、スタングレネード放って来たり、とてもすばらしいゲリラ戦です。

「ストームシールド！」

嵐の盾で弾丸の軌道を変えて銃弾を防いでいるようです。アナスタシアがレイアさんのかわりに回復を担当して、ガンツがなんとか耐えているようですが……ジリ貧です。リリはどこなのでしょう？まさか逃げましたの？いえ、それはありえませ……
・ 凄いマナ反応がジェットコースターの上から……
リリが渦々しい弓、魔弓ディザスターを構えています。

魔弓ディザスターは、紫色の先鋭的な本体なうえに、手を持つとこ以外が刃となっていて、切る武器としても使えるようです。そして、全体的に紫のオーラを放っています。概念クラスの兵器は自己進化機能……プレイヤーと同じく経験値（魂）を吸収し成長する兵器です。しかも、持てるだけでいい優れものです。

「えっ？」

リリが放った矢は、ポン太君が咄嗟に50センチメートルくらい避けたのに、腕が吹っ飛びましたの！

「音速くらい………?」

「ふもっ!? ふもっふ!」

ポン太君が全ての武装を解放して、辺りに破壊を撒き散らすと……
……なんで矢が戻って来てますの!?

「ふう〜」

リリがタバコを蒸してやり遂げたような仕草をしています。何故かムカつくのですの！

「ふもっふー!」

矢が当たって爆発し………もう、一本の矢がP90TRにくつついて、糸のような物が巻き戻り、リリの方に持って行きましたの。さっきのはこれですの!!

そして、可哀相なポン太君は装備を奪われて爆発しましたの。

「おい、レイアは無事か! どうした!？」

「無事ですの」

どうやら、苦虫を噛み殺したような顔をしていたので勘違いしたみたいですね。

「どつやら、皆、生き残れたようだな」

「ただいま」

しばらくは、休憩していたのですが、レイアが目覚め無いので、帰還する事にしましたの。

「じゃあ、先行くぞ」

「ええ」

100階毎に置かれている帰還の転送陣でガイツとグライは地上に帰りましたの。

「ほら、リリモ」

「先にどうぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「分かりましたの・・・・・・・・」

アナスタシアの手を握り、転送陣に入った瞬間、転送先を一度だけ変更し、転送されました。えっ、迷宮内ならどこでも自由に行けますの。

「まっ・・・・・・・・・・やられた・・・・・・・・・・」

ふふふ、私の勝ちですの。

6666階層にある宮殿に転移した私達の目の前にあるのは、壊れかけの深紅の月と蒼穹の月ですの。大きさは約10メートルで、コアは1センチメートルくらいの球体ですの。

「どうするの?」

「こうしますの。全アイテム、トラップ、モンスターをマナに還元するですの!」

「命令を実行・・・・・・・・・・モンスターの一部が還元できません」

モンスターを作る方法は何種類かございますの。普通に召喚や人口生物、融合、出産とありますの。問題は最後の出産で・・・・・・・・・・あのゲームは住所年齢をきちんと登録、確認されれば18禁モードもありましたの。ええ、人間などの女性を苗床にしてモンスターを量産する事が出来るモードがありましたの。人類側のメリットは経験値が5番になって闇堕ちする可能性が出るモードでしたの。ちなみに、闇堕ちするとNPCとなりダンジョンを徘徊するモンスターになりますの。そういう連中や自然の摂理にそって生まれた彼等は、生きている限りマナに還元は出来ませんの。

「還元終了しました」

「なら、それは放置して……これより、アンリの迷宮を廃棄しますの。両方の月のコアをイヤリングに形成し放出するですの」

「諒解」

すると、双月が崩壊して、中からイヤリングに加工された深紅と蒼穹が出て来て、私の手に収まりましたの。

「ここにあるアイテム持って行く？」

「ええ。お願いしますの」

外部から持ち込んだ一部のアイテムは消えないので、色々アイテムボックスに入れて帰りましたの。ルーン（紋章）のオリジナルグリモアはこれから役に立ちますの。ふふふふ、ルーン（紋章）で遊びまくってやりますのよ！バックアップの蒼穹と深紅の双月は手に戻りましたのでやりたい放題ですの！！

皆様、ここにやちはぐ。え？古い？そんなの知るかと思ってるテロリストのアルフィミイですの。

なぜ、テロリストかと云うと……スラムの消滅、モンスターの解放とかやったからですの。

モンスターについては、ダンジョンが廃棄されて消滅したからですの。ダンジョンは本来ある空間をダンジョンコアを使用して、空間構造を改変し、マナを使い使用者の望みの空間を作りだしますの。これにより、プレイヤーダンジョンは作成されますの。

例外は運営やダンジョンコアが無いプレイヤーが作り出したダンジョンがあげられますの。

そんなわけで、ダンジョンがあつた空間は、ダンジョンが廃棄されれば、当然の如く通常空間に戻りますの。そして、中にあつたマナから創られたり召喚された物（者）以外は周りに転送されますの。つまり、あのダンジョンで存在していた私が用意していない、自然の摂理にそつて生まれたモンスターはガイストの都市及び、その周辺に転送されますの。

ほら、テロリストですの。都市の常備兵力ではきつと足りませんの。

くすくす、あんな都市は滅びて仕舞えですの。

真つ黒ですが、人体実験とかやってる都市ですので、特に問題はありませんの。それに、転移はゆっくりですし、ガイツさん達も違う都市に行ってる頃合いくらいですので私にとって痛くありませんの。

「どつするの?」

「特に考えてませんの」

私達がダンジョンから転送された場所は、ガイストから40キロも離れた森でしたの。そこから50分ほど歩いていたのですが、山賊さん達に襲われている中規模の商隊(?)を見付けましたの。

「これはフラグなのかな?」

「いや、いくらなんでも」

「美少女に会って惚れられるフラグかも。それとも商隊に偽装した王族だったりするのかな?」

普通は有り得ませんの。どんな補正でそんなピンポイントに来ます

の？

「いや、どれも無いですの。ただ、路銀は私達には無いので、助ける方が……」

あれ、商隊から騎士や上級術師や銃器兵の方々が出て来て、山賊を逆に虐殺してますの。

「凄いな〜」

「……………私の気のせいですか？紋章機まで持ち出してきましたのよ？」

「気のせいじゃないよ？あれは、ロボットなの！」

子供は大喜び……………この世界では古代文明が作り出したアーティファクト「紋章機」が存在しますの。大きさは3メートルの小型から20メートルの超大型までございますの。

まあ、人間が上位の魔族や上位の魔物を相手にするために作り出した兵器とされていたのですが、プレイヤーの扱的には、強いゴレムと云う感じですよ。カスタマイズが可能なので皆さん悪のりしていたのを覚えてますの。

「向こうも出してきたの！」

いや、もう山賊や商隊って領域じゃありませんの。紋章機は戦術兵器ですよ？中には戦略級も存在しますが、どちらにしても値段は白金貨5枚（金貨500枚≒500万円）はくだりませんの。それにしても、ガンムファイターみたくどこでも召喚できるのは反則

です。」。

「ビームライフルなの。」

本当にこのゲームは混沌としていますの。Chaosフレアですの？さすがに宇宙艦隊は来ていませんが……あつ、決着ついたらみたいですよ。勿論、商隊側が勝利しましたの。

「動くな！」

いつの間にか、商隊の方々に囲まれていますの。銃や剣を突き付けられるだけでなく、紋章術の発動待機状態の方までいますの。さらには紋章機までこちらに向いていますの。

「抵抗は基本的にしませんの」

「怪しい者じゃないよー？」

「黙れ、手を挙げろ」

大人しく手を挙げておきますの。いざとなればどうとでもできますから……それに、私の勘が従っておけと云っていますの。

9話（後書き）

やっぱり出したかったロボットです。ちなみに、紋章機はレベル100からの装備です。上位のプレイヤーに関しては、魔改造されていない限り、ドモンちゃんや東方不敗の祖父様クラスに平気でいくので、そこまで怖く無い兵器です。

10話 捕まりましたの！

現在、私達は手枷と足枷を嵌められて、ライオンなどを入れる檻に入れられていますの。手枷などの拘束具や鉄格子などにもマナの変化を禁じる封印の紋章^{ハン}が刻まれていてどうしようも無くなりましたの。

はい、甘くみてましたの。誰も対魔王用の拘束具をいきなり嵌められるとは、思いませんの。

前にも云いましたが、私達はあくまで転生前の力の一部を引き継いでるだけですの。魔王のクラスだって、人間や亜人よりも圧倒的なマナの保有量とマナに対する干渉能力。そして、驚異的な身体能力ですの。ちなみに、勇者のクラスは成長速度が半端ありませんの。それに、勇者、大魔王、超魔王は成長限界が存在しない化け物ですの。EXになれる可能性を持つクラスって以外特に変わりは無いらしいですの。

そんな訳で、英雄未満の私達では逃げる事も出来ませんの。

「ねえ、何で私達を捕まえるの？」

そうですね。明らかにこんな9歳くらいの子供が山賊な仲間な訳ありませんの。

「はあ？そんなの、お前達が危険な存在だからに決まってるだろう

が？」

「危険？別に、危険な事なんて無いと思いますの」

「そんな伝説級のアーティファクトを大量に装備してやがる奴が何をほざきやがる！」

「……………」

二人で自分達の装備を確認してみる。

「アルフィミイは、ウロボロス、不死神、スレイプニル神話級、カーバンクル、ベーオウルフ伝説級……………」

「アナスタシアは、崩壊の紋章概念級^{ルン}、アテナ（ドレス）、グレイプニル（靴）、ニールングの指輪が神話級……………」

あはははは、普通は有り得ないクラスの装備です。神話級は概念級の下、伝説級の上です。それなのに、一つだけでも数々の国が共同で動いて手に入れるようなとんでもない品々を惜し気も無く装備して使い古してますから、警戒されて当然です。

「しかも、取り外せねえし……………くそっ」

ふふ、ゲームシステムで装備しているので、特殊のエロスキル以外の効果では本人以外は外せませんの。戦闘中なら武器を落とさせる事は可能ですが、それ以外は盗難防止の対策がされているので安心です。

「そんなのはどうでもいいから、だすの〜」

「そうです。待遇の改善を要求しますの！」

そう云いながら、念じてメニュー画面を開き、画面左上にある蒼穹の月と深紅の月から蒼穹の月を選択します。手で押せないの、なかなか上手いこと行きませんでした、選んだら3枠が出てきます。そこに、手枷と足枷、鉄格子を外すため、「カギカギ君」・・・ぶつちゃけキープードですが、全ての鍵と扉（ダンジョン、結界、入出制限がある所は使え無い）を開けるネタアイテムを選択し、生成します。これは、内側でマナそのものも創るので、私に対する封印効果は効きませんの。

更に、対策として手枷等の拘束具の内側の場所を触手の口に変化させ、拘束具をちまちまと食べさせています。鉄は余り美味しく無いです、封印効果が結構美味しいです。

「何を騒いでいるのかしら？」

「あつ、副長・・・実は先程捕らえた魔の力を放つ・・・
副長？」

副長と呼ばれた女性は、青い瞳に、金色の髪をボニーテイルの様にしている似合っています。しかも、モデル顔負けの体型が赤い服により更に強調して、フェロモンが凄いです。

「あ、アルフィミイちゃん！」

鍵を開けて中に入って来た女性は・・・多分・・・
「エクセ・・・母さんでしょ？」・・・母様・・・
」

わぶ、相変わらずですの。それにしても普通、逆くですの。後、柔
らかいプニプニした物体が気持ちいいぞこんちくしょうですの！

ええ、どうせ身体は女、中身は男ですの。

「それで、どうしてこんな所にいます……………の?」

何だか雨が降って来たような感じがしますの。

「よしよし、もう大丈夫だから、泣かないでね?お母さん、困うち
やうから」

「な、泣いてませんの!？」

くっ、これは……………汗、そう、汗ですの!？」

「ちなみに、何でこんな所にいるのかと云うと!あんなふざけた手
紙を寄越した馬鹿娘を探すためのなのよ?理解したかな?」

「ふにゃ!やふえ、ごひよめゆりひいふえ(やめ、ごめんなさ
い、許して)」

エクセ母様が、胸で首をロックして、口に指を入れて穂を虐めるで
すの。

痛いし、喋れ無いし、微妙に気持ち良いお仕置きが数分間続けら
れて、ようやく解放されましたの。

11話 怒られましたの(前書き)

ボス好きな方、ごめんなさい。先に謝っておきます。後、ちょっと崩壊気味だけど気にしないでくださいね

11話 怒られましたの

牢屋から抱き抱えられて、連れていかれたのです。アナスタシアも勿論一緒ですの。

「キョウスケ、入るわよ〜あら？ボス、来てたのね〜」

「エクセレン、ノックをしるとあれほど……………」

「むっ」

部屋の中には敵ついロリコンさん（コラ）と難しい顔をしたお父様がいましたの。

「アルフィミニ……………（ガンっ）」

「おと……………あいたっ！？ひ、ひどいですの……………」

「そうよ〜、女の子の頭を殴るなんてダメでしょ？」

「そうなの〜」

うう、頭にたんこぶが来ていますの。

「これは心配させた罰だ」

「それなら仕方ないわね。本当に心配したのよ？」

「うう、ごめんなさいですの……」

手紙には、生贄の事でもう会えないとか色々書いたのです。今、思えば、繋がりを残したかっただけなのかも知れませんの。

「……そいつらが報告にあつた神話級アーティファクトを持った魔の存在か……」

「「ひっ」

奥にいたロリコンさんから、とんでもないプレッシャーがつ、これは狙われてますの！

「悪意ある解釈しまくりな二人です」

「何か変な事を考えて無いか？」

「そ、そんな事はありませんの……」

「……！！（こくこく）」

とりあえず、私は母様にしがみついて、アナスタシアも、母様の後ろに隠れていますの。

「少佐、この二人の件はこちらにお任せください」

「そうよ？いくらボスでも、私達の娘に手を出したらうう風穴空けるわよ」「っ！」「……なぐんちゃって「冗談よ？」」

くっ、ゲームには無い強烈な殺気……身体が震えて身動きが出来ませんでしたの。今まで、こんな事は無かったですの。そう、ここまでの強烈な殺気を感じたのは初めてですの。黒騎士さんも、母様とロリコンさんに比べれば……月と鼈ですの。

「あらら、震えちゃって～大丈夫よ？お母さんのちよつとしたお茶目じゃない」

いえ、絶対本気でしたの！一瞬、顔から感情が抜け落ちてましたし間違いありませんの！？というか、愛の精神コマンド使ってみましたよね！？

「この世界には、そのようなコマンドは在りません……多分、きつと、だといいな」

ちよつ、そこは否定する所ですの！

「ふっ、ならば良い。我は友の元へと戻る。しかし、覚えておけ我等は悪を断つ剣だと云う事をな」

「いや、それってボスだけでしょ」

「ああ。俺達はただの傭兵部隊だ」

ロリコンさん（ボス）さんが去って行きましたの。これで落ち着けますの。

「さて、詳しく教えて貰おうか」

「そうね～さすがに気になっちゃっわよね～」

「(アナスタシア!?)」

「(なぜなにアナスタシアの時間なの)。アシスタントは黒兔ちゃんなの)」

また唐突にネタに走りやがりましたの。

あつ、黒兔は30センチから50センチくらいの可愛い黒い毛並みの兎ちゃん、私が生体人形とアーティファクト制作の技術を駆使して作り上げた全身アーティファクトの生体兵器です。素材も神話級と伝説級の生物を使用してます。まず、毛皮は魔狼フェンリルの毛皮(白銀貨600枚≡600M≡6億円)、瞳は金毛九尾の狐の殺生本体を使用(白銀貨300枚)、骨格と筋肉繊維はフレースヴェルグ(740枚)、足は白虎(420枚)、爪はフェンリルとフレースヴェルグ(165枚と129枚)という馬鹿げた素材とコストの最高級品なの。

「(きゅっ!)」

「(なぜアンリが超魔王と云うと行方不明になってから時間がたて、アカウント有効期限になったので)運営側がデータを弄って名前の通りゾロアスター教の暗黒神にして、ラスボスになったのでした」

「(きゅい)」

まあ、運営側にいいたい事はありますが、役に立つので良いでしょう。エネミー……それも、創造神の片割れをラスボスしたのですから、プレイヤーの限界を超えてるはずですよ。

「どうしたの？」

「いえ、何でも無いですの」

「それで、これからどうするんだ？生贄のクラスもあるからな」

「私達と一緒にいましょう？」

「得策では無いな」

「なんで？」

「考えてもみる。俺達は傭兵だぞ？俺達のいる場所は戦場だ。仮に二人が戦力になると、モンスターまで引き寄せられたら依頼どころの話でなくなる。俺も分の悪い賭けは嫌いじゃないが、アルフイミイや部下の事を思うとな」

「確かにそうね」

父様の云う通りですの。私の存在が二人を危険に晒すならいなくなりますの。

「じゃあ、結界の中とかどう？」

「王都とかならいけるかもなの」

「王都の守護結界なら確かに安全だな。あれは強固だ。」

「結界……それなら、定期的に匂いの排出出来るならどう

にか出来ると思いますの」

私の周りの空間に干渉して別次元に匂いを貯めたらいいですの。排出は魔物を呼び出すでしょうが・・・罾を仕掛ければいいだけですよ。それに、ギルドに依頼をしてもいいと思いますの。

「確かにその方法なら大丈夫だな。王都の結界で多少なら防げるだろう。ただ、俺達は構わないが依頼をするには金がかかる」

「わかってますの。だから、鍛冶師or錬金術師or付与術師として働きますの。それに、神話級アーティファクトを作れる技師なんて存在しますの？」

「・・・そんなもんいてたまるかつ！？（いないわよ）」

アナスタシアにまで突っ込まれてしまいましたの。残念。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9820v/>

アルフィミィ = ゼーケブレヒトの冒険

2011年10月13日14時54分発行